

2025. 5. 18 ツバメの巣との出会いから

好きな遊びの時、2～3人の年中児と教師で何気ない会話を楽しんでいました。

「ピーピー（先生）、一緒にお外いこう！」と女の子。

「そもそも、なんでピーピーなの？」と教師は尋ねます。

「だって、先生の髪の毛、鳥の巣みたいだもん！」「なるほどー！だからか！」

「そういえば、本物の鳥の巣ってみたことあるの？」と尋ねます。

「んー…」と子供たち。

「汽車ポッポ広場（年少用園庭）に本物の巣があったようなー！？」と教師が投げかけると

「それ知ってる！ゆき・すみれの時あるの見たもん！先生、見に行こうよ！」

「行こ！行こ！」と汽車ポッポ広場に見に行くことになりました。

汽車ポッポ広場につくと、巣の中にツバメがいます。偶然でした。

「先生！巣の中にツバメがいるよ！」と大興奮の子供たち。

ツバメが巣の中にじっとしているのを見て、「なんでツバメさん、巣の中で寝てるのかな？」「赤ちゃんいるんじゃない？」「えー、うそー！赤ちゃんの声聞こえんよ」と子供たち。

そこで教師は、脚立を持ってきて、近くで見えることを提案します。

「ぼく、写真撮ってくる！」と脚立に乗って持っている手作りカメラで撮る男の子。「中見てみたいなー」

しかし、子供たちの身長では脚立にのっても届きません。「先生！見てきて！」と子供たち。代表して教師が見に行くことにしました。

でもそこにツバメが巣に帰ってきます。そして少し警戒気味。「ちょっとツバメさん怒ってる？」と子供たち。

すると女兒が、「先生、ツバメに変身したら？そしたら仲間やと思って怒らないんじゃない？」

「どうしようかな？」と悩んだあげく、ツバメ帽子をそこで作り、かぶって巣に近づくことに。

そして、スマホをそっと入れて中の写真を撮ると、なんとそこには卵が6つ！

そこにいた子供たちと喜んでいると、私のかぶっている帽子を見て、「私もツバメになりたい！」と女の子。

「僕も！」と声が上がり、そこでツバメの衣装作りが始まります。そして、頭と羽ができあがると「ぼくも飛んでみたい！」と言い出します。

教師はゲームボックスを持ってくると、台から羽ばたきながらジャンプし始める子供たち。

その日のみんなの時間、学年全員で巣の様子を見に行き、モニターで中をライブ中継しました。

そして、ツバメに「ちょっとだけごめんね！」と言いながら、卵を一つ取り、子供たちに見せました。

驚いたのはその小ささ。うずら卵ぐらいを想像していた教師も、実際に手に取るととても小さい。そしてほんのり温かい。命を感じます。

子供たちも「めっちゃちいさい！」「可愛い！」「点々ついてる」など感じ方は色々です。

そこに親ツバメが帰ってきます。そして、明らかに巣でキョロキョロしています。

子供たちは「先生！卵とったで、ツバメさん探してるんじゃない？」「はやく返さないと！」と言います。

「ごめんね！」と言いながら、巣に卵を戻しました。

その後、昼遊びではツバメに変身しようとする子が増え、ツバメの頭を作り始めます。そして、くちばしでツンツンと何かをつついている子、手を伸ばして早く走ってツバメの速さをイメージしている子、段ボールの中に入りツバメのお家を作ろうとする子、実体験からの遊びの広がりも感じます。

何気ない会話からつながってきたツバメの巣。教師はツバメの巣の存在は知りながらも、どうやって子供たちに興味をもたせようかなとも考えていました。「あそこにツバメの巣があってね…」と教師から声をかけてこともたちに気付かせようとしたことも過去にはあるのですが、何か子供たちに響かないなと感じていました。まさか卵があるとは教師も思っていなかったのも、偶然の発見に教師も心が躍ります。その教師の感動も子供たちに伝わっていたのかもしれませんが。そこからはツバメに子供たちなりに遊びを通して触れていきます。その子なりの感覚で、その子なりの表現がなんとも面白い。巣の下で図鑑を使ってツバメを探している姿からは鳥の世界に足を踏み入れつつあるのかもしれませんが。月曜日にはもしかしてもう孵化しているかもしれません。

身の回りで刻々と変化していく自然現象に常に目を向けながら、その一瞬一瞬を子供たちと楽しみ、自然の不思議さ、面白さをこの幼児期に大切に味わっていきたくて改めて感じました。

